

探訪 北の風景 ⑦③

優駿さくらロード 日高管内浦河町

青木和弘

みことな桜のトンネルがつづき、沿道の足元にはカタクリが紫色の花を開いていた。「優駿さくらロード」は、浦河町西舎（にしちや）地区にある「うらかわ優駿の里公園」の沿道3キロメートルほど。樹齢80年から90年の約1000本のエゾヤマザクラがみごとに咲き誇る。ここには「うらかわ優駿ビレッジAERU（アエル）」や、日本中央競馬会（JRA）の「日高育成牧場」などがあり、浦河は、名馬シンサンやトウショウボーイの故郷だから、競馬ファンにとって一度は訪れてみたい場所である。

同牧場には、推定樹齢100年の巨木「百年桜」



や「長寿桜」があり、さらに道内最大といわれる「うらかわオバケ桜」もある。このオバケ桜は、今春から近くで見られるはずだったが、残念ながら新型コロナウィルスのせいで今年の「第53回優駿の里浦河桜まつり」が中止になり、それはかなわなかった。でも、天馬街道（国道236号）沿いにあるオロマップ展望台からなら遠望はできる。

浦河町は日高振興局の所在地で人口は1万1990人（2020年3月末現在）。気候は穏やかで、夏は涼しく、冬は雪が少ない。

太平洋がもたらす海産資源が豊富で、良質のダシが取れる「日高昆布」や、サケ、マス、スルメイカが特産として知られ、浦河のウニ漁は春なので桜の季節はお薦めである。

町内には競走馬の生産・育成を行う約200の牧場があり、3000頭以上のサラブレッドが駆けまわる。

ここは縄文時代から栄え、当時の装飾、石器が発掘されている。和人とかかわりは江戸時代から記録が残り、松前藩が浦川場所を開き、漁業による交易を行っていた。

開拓は1871（明治4）年、さくらロードがある西舎に九州の天草郡や大村郡から移住者が入り、その10年後からキリスト者の開拓団「赤心社」も西舎に集団入植している。1907（明治40）年に、種馬の繁殖・改良を目的にした「日高種馬



桜並木にはアエルの放牧場も隣接していて馬たちに合える。乗馬事務所で「馬のおやつ」（ニンジンスティック）が100円で販売されていた

牧場」（旧農林水産省日高種畜牧場）が設置になって馬産地の基盤になった。

同牧場の整備で桜やカエデ、カラマツなどが植えられ、やがて沿道の桜並木の植樹が始まる。

1930（昭和5）年に、現在のアエル体験農園あたりの交差点からアエル入り口を過ぎたあたりまで桜100本が植樹され、翌年に50本、1933年に現在の日高育成牧場事務所あたりまで900本が植樹されている。その後、桜の補植を行って、現在の桜並木になった。

第1回の浦河桜まつりは1968（昭和43）年に日高種畜牧場（現日高育成牧場）で開かれ、いまは会場がアエルに移っている。

アエルは、浦河町とJRAが「馬と自然とふれ



樹齢80年から90年のみごとなエゾヤマザクラが咲き誇り、桜のトンネルができる「優駿さくらロード」。放牧場や厩舎などが桜並木の風景を引き立てる



JRA日高育成牧場内にある巨木の「うらかわオバケ桜」。オバケは近くを流れるオバケ川の名に由来する。樹齢80年ほどだが、道内一の大きさで、全国で3番目とも。1月11日、環境省の「巨樹・巨木林データベース」に登録された（この写真は浦河町提供）

「あえる里」をテーマに、1998年にオープンした保養施設だ。乗馬体験などができ、宿泊施設や広い放牧場、パークゴルフ場などがあり、町などが出資する第三セクター「うらかわ優駿の里振興株式会社」が運営する。

アエルは、かつて優秀な成績を収めたサラブレッドの余生を送る場にもなっている。現在、30歳を迎えたウイニングチケットや、スズカフェニックスなどの名馬に合うことができる。さらに、隣接する日高育成牧場の施設や調教の様子を見学するツアーも実施していて、競馬ファンならずとも一見に値すると評判だ。ただ、本年度のツアー実施は、アエル（電話0146・28・2111）に問い合わせしてほしい。